

大賞

ひとなつ



くんにやく

少し寝汗をかいていて、目を覚ましたらもう昼過ぎだった。とはいえ、縁側に面している障子を全て締め切ってしまうと薄暗いこの部屋にいれば、今が朝なのか昼なのか、夕方なのかよくわからない。時計さえもない。昼過ぎだと思つたのは、蟬がじいじいとせわしなく鳴いているし、なんとなく部屋が暑くなつていたからだ。

ゆっくり起き上がり、はだけていた寝巻の裾を直した。浴衣を着て寝るのなんて、こんな田舎だけだと思う。枕元には真っ白いワンピースがあつて、まるで明治や大正時代に出てくる貴婦人が着るような、そういう服。私はするとそれを身に着けた。真新しいシャツみたいなの生地は、ひどく他人行儀な冷たさ。

「あら、起きたの」

日は当たるのに不思議と冷たい廊下を抜けると、本宅に出る。私が寝ているのは離れで、少し隔離されている気がしないでもない。

ワンピースを着て突っ立っている私を見上げ、そう興味もなさげに言つた祖母はしわに埋まつた目をさらに細くして、ああ、

「でも、少しは外に出ないと。それこそ体に悪い。せつかくここにきたのに」

玄関の方でごめんください、と声がして、しゅしゅといった感じで母が出て行く。私は勝手口から出ようと暖簾をくぐろうとすると、新聞を見ていた祖母が背を向けたままに言う。

「日傘もつていき。そうしたら生娘に見えるだろうて、なあ」

それには答えずに離れに戻り、白い日傘を手にとつた。祖母の言葉を真に受けたんじゃない、久しぶりの直射日光に耐えられる自信がなかった。これもここにきた次の日に私の部屋にあった。祖母がおいたのか母がおいたのかは知らない。縁に小さな白いレースがついている、シンプルなもので、もしかしたらこれも祖母が昔使っていたものなのかもしれないとぼんやり思う。

家の中の涼しさがやはり異常だったのだろう、外はまさに真夏の温度で、すぐ近くで聞こえる蟬の声ほど鬱陶しいものはない。日差しは刺さるように白い。冬にここに来てから、自分から外に出たのは初めてだった。母に付き合つて買い物にいったり、本宅や離れを囲む土塀から外を覗いたりはしていたけれど、自分の足で歩いて感じる空気はやはり別物だ。

「大奥さんのお孫さんよねえ」

背後から話しかけられ、若干のめまいをおぼえながら振り向く。作業用に長袖長ズボン、後頭部まで覆えるサンバイザーみたいなものをしてるので顔がよくわからないけれど、老人が

と咽喉の奥からガマガエルみたいな声を出した。「似合うねえ。それ着ると、流産なんかしてないように見えるわ」

「母さん、やめてって、言ってるでしょ」

祖母の背後にかかつていた暖簾のんをくぐり、手を拭きながら台所から母が出てきた。このところ、母はいつも泣きそうな顔で、チクチクといやみを言う祖母をいさめている。私は、もうここに来て半年も経つので良い加減になれたつもりではあるけれど、彼女のことは好きにはなれそうもない。私が末孫だったこともあつて、小さい頃は随分かわいがつてもらつたみたいだけど、今は小さくもないし、子どもでもない。

「笑由はお昼どうするの」

相変わらず突っ立つたままの私に、母がやはり泣きそうな顔で、それでも無理に笑顔をつくつて尋ねてくる。正直、この家に戻ってきてからお腹がすいたことなど一度もないので、別にいらないのだけれどそんなことはいえない。

「さっき起きたばかりだし、少し散歩してくる」

「外は暑いから体に悪いわよ、そんなの」

田んぼの中に立っていた。町に住んでいるのは老人ばかりだから、声もみな似ている。適当に会釈をし、生え際から流れてくる汗を必死にぬぐつた。

ここ一帯にあるのは祖母の家と、彼女が所有する土地。その大半は山か畑、もしくは田んぼ。土地を借りているのはほとんどこの辺りの人で、祖母のことを「大奥さん」と呼んで一目置いていたようだった。そんな彼女の孫が、半年前にやってきたと、小さなこの町ですぐに知れ渡り、たぶん私の名前を知らない住人はほぼいない。私はほとんどが知らない人だというのに。

「お散歩？」

尋ねてくるのに、また会釈を返す。汗が止まらない。こんなに汗をかいたのはいつぶりか、こんなに青臭い空気に触れたのはいつぶりか、よく思い出せない。

最近思い出すのはもっぱら、一年前の夏。

「え」

彼は文字通り、固まつた。目も丸くして、私の顔を見てじつと固まつてしまった。人間、本当に驚いたときは何も言えなくなるのだと、あらためて思ったものだ。真夏に、クーラーの効いた彼の部屋。手をつけずに放つておいたアイスコーヒーのグラスがじんわりと汗をかいて、水溜りをつくつていた。彼はまだ動かない。私はグラスがつくつた水溜りから人差し指で水を

ひっぱって、無意味な模様を描く。言葉は出てこなかった。
「……冗談、だろ」

やっと彼が発した言葉はバカみたいだった。ううん、冗談じゃないよとかぶりをふる。そうして二人で固まった。

自分の無責任のせいで、新たに命をつくってしまった、バカな大学生。体ばかりは大人になっていて、新たにできた命に恐怖を覚えてしまうほどの、ガキ。

ただ、怖かったのだ。自分の中に得体の知れない命が生まれてしまったことが、ただ怖かった。つわりがきたり、お腹が出始めることに抵抗があったわけじゃなく、そんなことにすら現実感も沸かないぐらいに、ただ。産んでも育てられないわよ、と泣きながらいった母が、現実的なことぐらいわかっていた。なのに、私はふわふわ、お腹に何かをかかえたまま、怖い夢の中を漂っているみたいだった。手術台の上のつても、それは同じだったのに。

墮胎。

それが終わった後、まだお腹に何かがいるんじゃないかとおびえた。怖い夢は終わらない。現実感のない、なのに、何かが私の中から出て行った恐怖。

もちろん、妊娠が判明してから大学は行かなくなつたし、彼からの連絡もない。「おろしてほしい」とも「産んでほしい」とも言わず、ただ青い顔をして私が帰るのを待っていた彼の顔、もうぼんやりとしか思い出せない。父も母も、彼のことに

「いい加減にしろ！」

「おれはここから出るんだ！」

「何だと」

急に言い争いが聞こえたと思つたら、目の前の板塀の一部が突然開いて男の子が一人飛び出してきた。板戸になっていたらしい。投げられたように転がってきた彼は、しばらく地面に転がったまま動かない。戸はバタンと勢い良くしまり、私はあつけにとられてその状況を見ているしかなかった。

「……つてえ」

彼は手をついて起き上がり、手やひじ、服についた砂を払う。中学生か高校生か、そのくらいだろう。こちらを向いた彼の顔は痣だらけだった。

「……本城寺でしょあんた。なんでこんなとこいんの」

前髪が長く、目にかかっているので彼の表情はうまくみえなけれど、きゅつと結ばれた口角は下がることも上がることもない。口の脇にある痣も、動かない。ただ音を発しているんだという感じの、しゃべり方。

「私の名前知ってるの？」

「有名だよ」

彼はふつとつばを吐いた。

「……道がわからなくて」

「ふうん」

私がいるのが日陰だからか、日差しの中に立つ彼の白いシャ

ては一切追及してこなかった。不思議だったのは公言していないのに、どこで私がおろしたことを耳に挟んだのか、数人の友達からメールが届いたこと。チェックするのも億劫で携帯も解約した。学校もやめた。私はほとんど閉ざされていく。怖い夢は終わらない。体の中心から、じわじわと。赤ん坊の泣き声が聞こえるようだった。

私が、いや、家庭が暗闇に飲まれる寸前に、父と母は話し合

って、私と母が母の実家に移ることがきまつた。事実流産ではないのだけれど、祖母にとつてみれば同じことらしい。どこの馬の骨もしれない男と散々遊んだ後に、子どもまでつくつて殺した、ふしだらな孫娘。

話しかけられるのが嫌で闇雲に歩いたせいだろう、知らない路地にはいつてしまった。路地、というか、垣根と垣根の間の舗装されていない道。車が一台ギリギリ、通れるぐらいの道だ。板塀がずっと続いている。両サイドにある、板塀の向こう側の家は祖母の家のように木造平屋で、黒ずんだ木製の壁や板塀がある。けれど、やはり地主の家だけあって、祖母の家はもっと重厚な感じがある。塀も、もっと分厚いし、瓦のついた土塀になっている。ここはもつと簡素で、少し廃れた感じがある。門みたいなものを通り過ぎても、また同じような家がどこまでも並んでいた。どこかわからない。暑い。

ツが妙にまぶしく見える。薄茶色の髪の毛が、キラキラと光って見えた。じつとこちらを見た後、彼は歩き出す。五十mぐらい行った後に振り向いて、手招きをし、口を開いた。

「案内してやるよ」

隣に並ぶと、私と彼は同じぐらいの背丈で、男の子の中では小さい方だろう。さつきはまぶしくてわからなかったけれど、彼の頬には細かい傷痕がいっぱいあって、近くで見ると痣はかなり生々しく痛々しい。きつと何度も殴られたことがあるのではないかと、邪推する。半そでから伸びる浅黒く細い腕にも痣があつたし、擦り傷みたいなものもたくさんあつた。それらのいくつかはかさぶたになっていたけれど、痛々しさに変わりはない。ただ色素の薄い髪の毛だけが涼しげにゆれている。

「……君、中学生？」

「中三」

「この近くに中学校あるの？」

「片道一時間。自転車で四十分」

そっか、と言ったものなんとなく手持ち無沙汰で、日傘をくるくる回しながら歩いた。彼が不意に立ち止まつたので顔をあげると、いつのまにか開けた平地に出ている、板塀の迷路に迷い込む前に見ていた畑や田んぼの景色が視界に入ってくる。蝉がじいじい、せわしなく鳴いていた。気持ち悪いぐらいい汗をかいていて、なのに彼は涼しげな顔でたまにぼりぼりと頬の痣をかきながら、前を向いている。立ち止まつた彼が指差す先

を見ると、確かに祖母の家が見えた。そして私が寝起きしている離れの屋根も。

「ありがとう」

いきなり背後でエンジン音がして振り向くと、軽トラックが止まっていた。後ろに車がくるのがわからないほど、ここは蝉の音がうるさい。運転席の窓が開き、紺色の農協のキャップをかぶった老人が顔を出して、まぶしそうに私と少年を見た。「芙由ちゃん、神田の坊と一緒におるなんてどうしたんだ。乗りなさい乗りなさい」

なんで私の名前までを知ってるんですかと尋ねたいところだったけど、さっきの少年の答えを思い出して口をつぐんだ。車に乗せてもらえるのなら有難い。少年がドアを開け、私は素直にトラックの助手席におさまった。座った瞬間、疲れがどっと足に回る気がする。老人特有のなんともいえないにおいが車内に満喫しているような気がしたけれど、わがままはいえない。効かないクーラーが音だけうるさく稼働している。

「神田の坊も、ちゃんと家に帰って母さんみたらないかんぞ」

「わかってるよ」

少年が笑った。というか無理に口角を引き上げた。痣がいたそうにゆがむ。

その日から気が向けば散歩をした。泣きそうな母と、ちくちくと棘を吐く祖母。私がない間、どうなっているのかよくわ

からないけれど、少なくとも母が泣きそうになつていなければいい。家の中にももってはいたくなかった。ぼんやり、あの少年のことを考えたりもした。あの家の方に行ってみようかという度か思ったけれど、やめた。

田んぼや畑のわき道、この辺りの地理にも慣れてきたし、新しかったサンダルも足になじんできた。道行く人の好奇の目もしだいになくなつて、彼らにも私がふらふらと歩く姿が定着したのかそんなに話しかけられることもなくなった。汗をじわりとかきながら白い日傘をくるくると回すのが、少し楽しくなる。不思議なことに、いつも目を覚ますと日によって色々なワンピースが枕元においてあった。貴婦人みたいなその格好で歩くことにも慣れた。だから家から持ってきた服や父が送ってくれた服は、未だに着ていない。

夕暮れ、蝉の鳴き声の中で私はしゃがんで、ぼんやりと水路を眺めていた。カエルの声も少し混ざっている。さっきまで農作業をしていた人たちは私に会釈をして、トラックに乗って去っていった。辺りがオレンジ色に染まっていく。身に着けていた白いワンピースも同じ色になる。はじめのころは他人行儀だったこの生地も、いつのまにかよく肌になじんでいた。

「何してんの」

振り返ると、いつかの彼が立っていた。はつとする。

あの薄茶色の髪の毛が不ぞろいに刈りとられていて、不恰好な丸坊主になっていた。誰かに無理やり切られたのだろうか。

「……あんまり。寒いのも暑いのも苦手。秋が好き」

「オレも秋が好き。……ほ、ん、じょ、う、じ、ふ、ゆ、こ、か、ん、だ、な、つ、ひ、こ。二人とも、名前、長いな」

彼がふつと微笑んだ。つられて微笑む。色素の薄い髪、色素の薄い瞳。きつと細かい傷や痣がなければ、端正な顔をしているのに。もそもそと動く、やはり傷だらけの彼の腕を見つめる。男の子らしい細さを有したその腕は、なのに、力強さは何もなかった。ふと、お腹にいたはずの赤ん坊を思い出す。細い腕。搾取されるだけの。

自分でも気づかないうちに、彼の腕にあるかさぶたに触れていた。ガサガサした感触。かすかな汗のにおい。

びくりと体を震わせてこちらを見た彼の目はおびえていた。あ、ごめん、と声が漏れる。那都彦は立ち上がって、上から私を見つめている。逆光になって表情は見えない。怒ったかもしれない、と地面に目を移すと思ってもよらない言葉が彼の口から降ってきた。

「川、連れてってやるよ」

「え？」

「川。水路よりも綺麗だし、見てて飽きない」

「でも、学校は——」

そこまで言って、夏休みだということをお願い出した。私の考えを読み取ったみたいいうん、と那都彦が頷く。

「ここから近いの？」

「……名前、なんていうの？ 苗字しかしらないよ」
遮られる。彼は私を見ていて、美しいほどの無表情で、痣は痛々しい。

石を渡されたので、地面に書いてみる。芙、由、子。

「なんて読むの？」

「ふゆこ。君は？」

石を渡すと彼は地面に文字を書く。那、都、彦、な、つ、ひ、こ。綺麗な字だった。

しばらく地面に書かれた字を細く長い指で彼はなぞって、またいくつかの単語を地面にきざむ。夏、冬、那都彦、芙由子、summer、winter、hot、cold。

「オレが、夏で、あんたが冬か。冬、好き？」

彼を見た。川の流れを見つめている。彼の頬にある痣を、私は見つめた。答えないままで、時間がすぎる。ふと那都彦が、自分の問いに自分で答えるように口を開いた。

「芙由子がきたときに、いろんな噂があったよ。いろんな。けど、芙由子のばあちゃん怖いだろ。みんな怖いんだよ、本城寺のばあは。だから、芙由子の噂をして、いじわるなことを言いたがってる。良い人ばかりだけど、ばあが怖いんだって、オシの父さんも、怖いって、言ってます」

ああ、また。言葉をただ吐いてるだけみたいにしやべる。頬の筋肉はほとんど動かない。

「父さんは、すごい、良い人なんだ。本当は。けど、たまに何にもわかんなくなっちゃうんだよ。だからオレを殴って、気づくんだけ。仕返そうなんて思わないよ。できないよ。だって父さん、泣くんだけ。オレを散々なぐった後に、オレを殺すってわめいた後に、泣くんだけ。母さんも泣くんだよ。おもしろいだろ。クラスのやつらよりもよっぽど優しいのに、よっぽどひどいんだ」

このまま彼が、風にさらわれていったらどうしようかと、あるはずもないことを、思う。濡れていたはずの髪の毛が、もう乾いていて、軽やかにさわさわと揺れているのに、なのにこんなにも、悲しい。「笑えないよ」と言えない自分が、悲しい。

「……帰りたく、ないんだ」

立てた膝に、また顔をうずめて、もう彼は何も言わなかった。蟬が見計らったように鳴きます。気のせいだとわかっているけ

思い出す。今思えば、いやなほどじつとりした目をしていた彼は、痣だらけだった。最近はそのままで目立った傷はないけれど、完全になくなるわけではなかった。たまに彼の口からぼろりとこぼれる「父さん」という単語は震えていて、きつとそれが痣の原因であることは、簡単に想像できた。けれど、尋ねられなかった。子どもを育てられもしないガキが、自分じゃない誰かの傷を背負うことなんか、できない。一緒に背負うことも、きつとできない。聞いてしまったら最後だな、と無意識に思う自分がいる。

離れにいる時間が長くなった。家からもつてきた服よりも、また、ワンピースを着るようになっていた。

縁側に座って月を見ていた。八月の終わり。私は寝巻の浴衣を着て、少し寒かったからカーディガンを羽織って縁側に座っていた。街灯がほとんどないこの辺りでは、本当の月明かりと星明りを実感できる。ここに来て一番最初に驚いたのは、月のまぶしさだった。来たばかりのころは夜中に、電気もないのに、障子を通して差し込んでくる月明かりが明るすぎて怖くてよく泣いていた。なぜだか不安になって、しくしくと、泣いた。けれど今はもう、涙はでない。ただ、綺麗だと思う。

「芙由子」

不意に板扉の向こうから私を呼ぶ声があった。かすれていて、無機質で、けれども聞き覚えのある声。縁側から降りて、小さ

れど、ずん、と子宮が重くなったように感じる。立ち上がるのも、那都彦に何か声をかけるのもひどく億劫だ。ただ黙って、風の音を聞いていた。隣に座る、傷だらけの少年に、言い様のない悲しさと愛しさを、同時に抱いていた。

一週間に三回は、那都彦は朝に私の離れを訪れては川に連れて行ってくれた。毎日来るときもあった。できるだけそこに長くいれるように、私は家を出る前におにぎりなんかをつくって、持っていく。最初はいぶかしんでいた母も、尋ねても私が答えないだろうことを悟ったのか、もう何も言っておくなくなった。祖母は相変わらずしわに埋もれた瞳で新聞を読んでいる。

二人でおにぎりを食べていると、まるで無人島にきたみたいで、いぶん楽しかった。川で遊んだ夜は、疲れとなんととも言えない満足感でよく眠れた。白かった肌が、少し色づいた。那都彦は、髪の毛と肌の色がぐんぐん近づいていた。彼はよく笑った。私もよく笑った。よく晴れた。夏だった。

八月が中旬に差し掛かり、夕方がだんだんと涼しくなってきた頃、ぱたりと那都彦が姿を見せなくなった。最初はそれなりに気になっていたらけれど、情報を得る元がない。彼も中学三年だし、もしかしたら受験のために勉強を始めたのかもしれないと思った。行こうと思えば、彼の家に行けるだろうけれど、なんだかそれははばかられた。板戸から飛び出してきた那都彦を

な板戸をあける。と、同時に那都彦が顔を覗かせた。顔を見て、思わず息を呑んだ。口の端から血がにじんでいた。まぶたが紫色にはれていて、彼の表情をいつそうわかりにくくしていた。叫びそうになってしまふ。それほど、今までで一番ひどい傷だった。どうしたらいいのかわからず、ただ彼の顔を、傷を、無遠慮に見つめてしまふ。泣きそうだ。こんなにも月明かりに照らされて、彼の傷が、痛みが、私の無力さがこんなにも顕著になつてしまふなんて。あんまりだ。

「芙由子、お願いがあるんだ」

板戸の高さが一メートルもないので、お互いしゃがんでむきあっていて、顔も近い。那都彦の話すと漏れる息は血なまぐさかった。傷の手のことだろうと思ひ、彼の手を引いて庭に戻る。縁側に座らせた。屋根の下に入ったからか、月明かりがやわらぐ。

「傷の手当、しないと」

どこで見たのかわからないけれど、確か部屋に救急箱があったはずだ。縁側に彼を残し部屋に入ろうとすると、腕を掴まれた。しっかりと。搾取されるだけの腕が、何かを掴み取るようにしている。必死で。彼を見る。彼も私を見る。腫れたまぶたに邪魔されているけれど、そこには色素の薄い綺麗な瞳があつて、私が映っていた。

「……俺を、つれて、逃げてほしい」

口をあけた彼の前歯がなかった。ぽっかりと穴が開いていて、

暗闇が広がっている。

しばらくしてから、那都彦は泣いた。声をあげず、だけれど私にはその声は確かに聞こえた。ぼろぼろ泣く。こびりついていた血がとけて彼の襟ぐりを赤く、茶色く、染めた。私は無力で、何もできない。彼の指が腕から離れていく。それを追いかけるように縁側に座ったものの、どうしていいのかわからなかった。那都彦の隣に座り、泣きじやくるのを見つめるしかない。そっと肩に触れた。薄い皮膚の下にはすぐに骨がある。ここにももしかしたら傷があるのかもしれない。そう思うと怖くなった。触れていいのだろうか。何も守れなかった私が、何もできない私が。

「お、ねが、い、だから、つれて、つて」

泣きながら必死で懇願する那都彦と、ただ肩に触れるだけの私。なんて滑稽なんだろう。

こんなにも愛しいのに、何もできない。こんなにも不甲斐ないのに、何も変わらない。

そっと、彼の頭を引き寄せた。最初びっくりとうねった那都彦の体は、それでも、ゆっくりと私の腕に収まった。彼は私の胸の中で泣く。涙や鼻水や血や、もしかしたらそれ以外の液体も私の中にしみこんでくる。やわらかい髪の毛の感触。呼吸をするたびに漏れる、生暖かい血の匂い。愛しいと、無条件で思う。しばらくそうして頭を撫でていると、不意に彼の指が私の頬に触れた。何かを思う間もなく、唇が重なる。ねっとりとした

熱をもった彼の唇は、血の味がした。ゆっくり彼を引き離すけれど、すぐにまた唇を求めてくる。最後には観念して那都彦の好きなようにさせていた。とはいっても、ただ、唇を押し付けてくるだけでそれ以上は何もなかった。夜も更け、二人で縁側に寝転びながらまどろみ、気づけば唇を合わせ、そしてまたまどろむ。まるで親鳥が雛にえさを与えるみたいに。どっちが親なのか、雛なのか、よくわからないけれど。

「俺、行く」

山際が明るくなりはじめ、雀が鳴いた。蝉はまだ起きていないのかとぼんやり思っていると、那都彦は縁側から降りた。私が入口を開こうとすると、彼は遮って私に何かを握らせた。小さな、固いもの。彼の、欠けた歯。どこに持っていたんだろう、と間抜けなことを思う。

「じゃあね」

那都彦は朝日の中に消えていった。理由も何も、語らずに、傷だけを背負って行ってしまった。

九月に入っても相変わらず日中は日差しが強かったけれど、日が暮れるのが早くなって、夜は少し寒いくらいだ。那都彦は本当に現れなくなった。私は気が向けば散歩をする。たまに制服姿の中学生を見かけることはあっても、その群れの中に那都彦を見つけることはできなかった。

「ねえ、母さん」

夕飯が終わり、祖母が自分の部屋に戻ったときに台所で母の隣に立った。手元だけを見ていると、随分年をとってしまったんだ、と悲しくなった。きつとここ一年で、だろう。

「なに」

母も私の方を見ないで、洗いものをする自分の手元だけを見ている。

「神田、つてこの家、知ってるっ」

「神田、つて、あの」

そこまで言って、やっと彼女は私の顔をみて、久しぶりに泣きそうな目を向けた。何が言いたいの、何を知っているの。じつと目を見つめた。那都彦の、あの薄い茶色い瞳とは違う、曇った黒い瞳。

「何か知ってるの」

「……奥さん、亡くなったって」

「は？」

「あそこの奥さん、だいぶ前だけど事故に遭われて、体が不自由だったみたいで……もともと、体の弱い人だったし……」

「那都彦は？」

「誰？」

「……その息子さん」

「ああ……あの子……わからないけど……」

「奥さんが亡くなった日っていつだったの？」

「八月二十八日だよ」

しわがれた声が、暖簾の向こうからした。居間に顔を出すと、祖母が立っていた。私よりも小さいのに、貫禄がある。いつもは開いているのか閉じているのか、わからない目で私を見ていた。少ししたじろいだ。彼女は私を見据えて続ける。

「八月の終わりだよ。眠るように死んだっっちゃう話だわ」

「知らなかった」

「そうだろうて。見送りのなんもしとらんわ」

言いたいことは済んだのか、祖母は、はっ、と息を吐いて自室に戻った。八月二十八日。確か、那都彦がひどい怪我をして私の離れに来た二日前。まさか。そんな。母が暖簾をくぐって私の後ろに立っているのがわかった。そっと振り向くと、彼女は目を伏せて手をエプロンで拭きながら遠慮がちに口を開いた。

「芙由子、あんた、あの子とよく遊んでいたでしょう……それをあんまりおばあちゃんがよく思わなくてね」

「どういことっ」

「おばあちゃん、やっぱりあんたのことがかわいいのよ」

泣きそうな顔。母が急にかわいそうに思えて、同時に、憎らしくもあった。何かを隠しているみたいな言葉が気に食わない。返事もせずに離れへ戻る。かなり寒い廊下の、庭に面している側は大きな全面ガラス窓になっていて、月灯りが私を照らす。秋になって、より凜とした光を放つ月。泣きたくなかったけれど、

我慢する。寒くて、鳥肌が立った。

次の日、那都彦の家へ向った。ばれないように、離れから板戸を出て直接向う。よくわからなかったけれど、記憶を頼りに歩いてみる。大まかな地形を把握している今、意外にも簡単に彼の家の周辺にたどりつくことができた。木造平屋が建ち並ぶそこは蟬の合唱を失ってしまった今、ずいぶん静かで怖いぐらいだった。昼間だからか、誰の声もしない。久しぶりに歩いて、少し疲れたけれど心が急いで自然とはや歩きになる。なぜか白いワンピースを着てきてしまつて、白い裾がひらひらと自分の視界に入るたびにクラクラした。

「ここだ」

那都彦が飛び出してきた板戸を見つめる。玄関口に回ればよかつたけれど、なんだか入りにくくてそつと板戸から入った。すぐに庭、そして縁側。不思議なことに障子に障子紙は貼られておらず、ガラスから透けるのはいくつもの木の格子と薄暗い室内。まるで人が住んでいないみたい。そんなことを考えて、ふと思ひ出した。

「俺を、つれて、逃げてほしい」

泣いた那都彦の言葉。

「那都彦？ いないの？」

ガラス戸にかけより、静かに叩いてみる。がしやんがしやんと無遠慮な音が響くだけ。手をかけてみると、なんの抵抗もな

くすんなりと戸は開いた。拍子抜けするほど軽い。サンダルを脱ぐ。素足を乗せた縁側はほこりつぼくてざらざらした。踏み

込んだ瞬間に異常なほどの熱気が奥から押し寄せてくる。私があ家の涼しさになれてしまっているからだろうか。もう外だつて随分涼しくなっているのに。若干動きにくく思いながら、格子戸になってしまっている障子も引く。入つてすぐの部屋に大きな白いベッドが日に焼けた畳の上に、ただ一つおいてあった。病院で見ると、すっかりしたベッド。誰かが寝ていたのか、そもそもベッド自体が重いからか、畳はベッドの足があるところだけが食い込みこんでいた。汗が毛穴から落ちてきて目に入った。痛い。暑い。ぬぐいながら、他の部屋も見る。どの部屋もベッドがあつた部屋みたいに色あせた畳しかなく、家具みたいなものは一切なかった。台所にも食器棚や冷蔵庫みたいなものもなく、ほこりつぼい空気がかすかに漂っていた。光の加減で漂っていてほこりの粒が輝いて見える。むしむしとした気持ちの悪い空気。暑い。こんなところで那都彦は暮らしていたのだろうか。父親から暴力をふるわれながら？

これか、と思う。母や祖母が私に隠していたこと。

不意に玄関の方から物音がして、誰かが入ってきた。帰ってきたのかもしれないと走つていくと、いつか那都彦に送られる私を車に乗せてくれた老人が、汗をぬぐいながら立っていた。やはりここは特別暑いのかもしれない。彼も私を見て驚いている。

「芙由ちゃん、どうしてこんなところにおるんだ」

暑くて、気持ち悪くて、私は倒れた。

後日、母から聞いた。私を運んでくれたのは、祖母の幼馴染のシゲさん、という名前の老人だつたという。そしてシゲさんから聞いた。那都彦は八月のおわりに——彼が私の離れに来た次の日に——この町を出て行ったのだと。

「でもなんで、出て行かないといけなかったの」

貧血で私が倒れてしまい、運んでくれたシゲさんは次の日にわざわざ見舞いに来てくれた。

「それは、な、ま、事情もあつて」

「なんで」

「……神田の奥さんがいてこそその、あの家だつたんだよ。家を出て行く二日前に危篤状態でなあ、芙由ちゃんは知らなかったと思うけれど、な、芙由ちゃんのばあさんがなあ……」

「おばあちゃんか？」

シゲさんはしぶしぶと語り始めた。

那都彦はまだ小学生だつたとき、那都彦の母親の由里さんは自分が運転していた車で事故を起こし、全身麻痺になつてしまった。そのときに那都彦も一緒に乗っていたらしいけれど、彼は軽傷で済んだらしい（額の傷はつとそとよきのものなんだろ）。母親は寝たきりになり、呼吸器をいつもつけていたという。母親の面倒を見るため、父親は仕事をやめて那都彦と三

人、母親の実家にやつてきた。そして三人と母親の両親の五人で暮らし始めた。そこまではよかつたみたいだ。そのうちに母親の両親が死んで、もとの三人暮らしになった。介護が忙しく、仕事もままならない。ストレスが溜まる。そうして、那都彦に手が出た。

「みんなは、それを、知つてたの」

「……あんな痣や傷ができてつたら、いやでも目に入る、わ」

近所でも、父親の怒鳴り声は有名だつたみたいだ。なのに、誰も止めには入らなかった。それどころか、そんな父親のことをバカにして学校でも那都彦はいじめられていた。ことを荒立てることをよしとしない、この小さな町の風習や、老人ばかりの生體系じゃなにもできない。罵倒され、殴られる那都彦が目の前に見えた。最初に会つたときだつて、板戸から投げ出されてきた。

「出て行くんだ」

と、あのとき叫んだのは、那都彦の精一杯の抵抗だつたのかもしれない。小さな傷。大きな痣。無力な子ども。

「でもそれとおばあちゃんとの関係があるの」

シゲさんははあ、と息をついて、さつき母さんがもつてきた麦茶を飲んだ。しわだらけの首がかすかに動く。

「神田の家は芙由ちゃんのばあさまの貸家だつたんだよ。由里子ちゃんはずっとと神田の家の子だが、旦那と坊は違うでな……あそこのおつかあとおつとうが死んでからは家賃もろくに

払えんで、由里子ちゃんもようはならんし、芙由ちゃんのばあさまがな、由里子ちゃんがなくなったらな……出て行けつてな……」

「信じられない」

「地主つちゅうのんは、そういうもんだ」

連れて行つてと泣いた那都彦。帰りたくないと思つた那都彦。何も知らなかった、何もできなかった私。バカみたい。

まだふらふらしたけれど、シゲさんの制止も聞かずに私は立ち上がり本宅へ走った。まるで那都彦の家とは違い、相変わらず涼しいそこで、祖母は目を細めて新聞を読んでいた。

「おばあちゃん、那都彦の家になんてことしたの」

「もう起きていいのかね」

「答えて。私も知らなかったのに」

彼女の目が私をとらえる。いつもしわに埋もれてる、なんてことを勝手に思っていたけれどそれは違った。だつてこんなにも、あの細い目は光をたたえて私を見ている。すこしたじろいだ。母が暖簾の間からこっそりこちらをうかがっている。祖母は新聞から目を放すことはしないで、言葉だけで私を射る。

「何も知らん子どもが、知つたつてわからん子どもが、知つたところで、粹がつたところでなんになる。子ども一人産めんかつた芙由子は、何かできたんか？ 何もできんのに、何か言えるんか。ちよつと、明美」

珍しく祖母が母を名前で呼んだ。母ははい、と震える声で返

事をしてお茶を持ってきてちゃぶ台においた。そうして祖母は静かに新聞を読んでいた。私はただ、呆然と立ってぼろぼろと涙を流す。頭のどこか冷静な部分で、本当にガキだ、と、自分がつぶやいた。そつと肩に温かな手がのつて、それは母の小さな手だった。

「少し部屋で休んでらっしゃい」

ふらふらと離れに戻った。途中シゲさんと廊下ですれ違つたけれど、彼は目を伏せていて、そもそも私は何も言えない。怒り、でもない。何かわからない。たぶん、おそらく、言葉にするなら赤ん坊をおろしてしまつたときの喪失感が今、襲い掛かつてきたみたいだった。あのときは、ただ、自分の行為の愚かしさや自分自身に吐き気を覚えたけれど、今はただ救われたい子どもへの罪悪感や悲しさで胸が張り裂けそうになっていた。

那都彦を、私の赤ん坊を、強く抱きしめてあげられたらよかった。見せかけの愛情だけじゃなくて、本当の慈愛で。蒲団に突つ伏した。涙があふれてくる。

そのまま眠っていたようで、目を覚ましたら夕方だった。やわらかい夕陽が差し込んでくる。蟬にかわつて秋の虫が鳴いている。鈴虫、コオロギ、キリギリス。聞き分けができるわけじゃないけれど、もしかしたら那都彦は聞き分けができるかもしれないと思った。あの川も今頃はきつと、虫の大合唱に包まれているはずだ。あの用水路の近くだつてススキが生い茂つてい

るだろう。那都彦と芙由子、の文字を思い出す。夏と冬。絶対に隣り合わせにはならない。近づけない。触れられない。お互い好きな秋が、一つの接点だつたのに。

ふと手に何か握っているのに気づいて手を開くと、それはあの夜に那都彦が私にたくした欠けた歯だった。どこから持ってきたのかさつぱり覚えてないけれどせめて、この子だけでもと思つて握りなおすと、尖つた部分が手のひらに刺さつた。痛かつた。

虫の声が遠くなる。秋が近づく。夏が遠くなる。